

「競争的市場」に変貌した、管理者なき国際石油市場

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

1 月 17 日から 21 日まで、フランス・英国に出張し、弊所の「アジア/世界エネルギーアウトック 2015」の内容や日本の最新のエネルギー政策動向を中心としたプレゼンテーションとそれに基づく意見交換を各所で実施した。今回の意見交換では、再生可能エネルギーや原子力発電の将来、省エネルギーの更なる深掘りの可能性、二酸化炭素回収・貯蔵技術 (CCS) の可能性等について、弊所アウトックについて様々な意見が寄せられ、今後の世界の長期エネルギー需給見通しにおける分析実施にとって大いに参考となった。また、今回の弊所アウトックの焦点が「低価格シナリオ」であったため、そのシナリオの考え方そのもの等について突っ込んだ議論が行われ、筆者にとって大変有意義な機会となった。

「低価格シナリオ」が今回の意見交換で大きな関心を集めたのは、いうまでもなく、現在の市場環境が著しい低価格になっており、現実の問題として、エネルギーに関心を持つものにとって原油価格の現状と将来が最大の重要事項の一つになっているからである。その点、実は今回の意見交換を通して、現在の国際石油市場および原油価格問題を考える上での興味深い一つの視点を改めて再認識させられることになった。それは、国際石油市場における原油価格問題は、ある意味で「余剰能力の管理の歴史」という観点から捉えることができる、という点である。

19 世紀後半に始まり現在に至る国際石油市場の歴史においては、様々な理由から、一部の例外的な時期を除いて、市場には余剰の供給能力がほぼ恒常的に存在した。結果として作り出されている供給能力とその時々々の需要の間にはミスマッチが存在し、そのため価格は著しく低迷したりその後乱高下したりする状況がしばしば見られた。この価格乱高下は供給者にとっては（消費者にとっても）大問題であり、それを何とか抑え込み市場を「安定化」させるための大掛かりな取り組みが常に模索される、という歴史であったのである。

こうして、国際石油市場の歴史を紐解くと、スタンダード石油による市場管理、「アクナキャリー協定」による市場調整、テキサス鉄道委員会による生産調整、セブンシスターズによる中東石油の「共同管理」、OPEC による産油国間の生産割当、スイングプロデューサーとしてのサウジアラビアの生産調整等、様々な取り組みが進められてきたことがわかる。これらが実効的に機能している時、国際石油市場における原油価格は初めて安定する時期を迎えてきたのが実態であった。

しかし、同時にこれらの機能は必ずしも永続的に続くものでなく、市場の変化やこれらの仕組みそのものに内在する問題によって、機能が不全となり、国際石油市場における管理メカニズム・管理者が無くなる、ということが繰り返されてきた。こうして、国際石油市場は原油価格が低迷すると共に激しく変動する競争的な市場と何らかの管理者が存在しその調整によって相対的に安定した市場が交互に出現してきたのである。その観点では、市場に管理者が存在し、機能していることが当たり前というわけでは決してなく、むしろその機能で市場が本当に安定している時期は限定されてきたという方が正しいといえる。

現在の国際石油市場は、まさに市場の管理者なき状況にある。2014 年前半まで続いた原油価格 100 ドル超の時期には、万一原油価格が下落する場合には、OPEC 産油国が、なかんずくサウジアラビアが生産調整を実施して価格を防衛するのではないかと大方の市場関係者が認識していた。しかし、現実はその真逆であり、サウジアラビアを始めとする主要産油国は市場シェア競争に乗り出し、結果として、上記の市場認識が完全に間違っていたことが白日の下に晒され、原油価格は下支えを失って底が抜けてしまった。2015 年の一年間を通じて、市場シェア競争を収めようとする動きは全く見られず、最近になって、イランの市場復帰、サウジアラビアとイランのライバル関係の高まり、その中で世界的な需要不振の可能性など、競争環境を一層激しくさせるような要因が多くみられるようになっている。その状況下、原油価格は 30 ドルを割り込み、さらに下値を模索する動きを示しているのである。

競争的な市場においては、価格は激しく変動し、一旦加速度がついた価格下落がどこまで進むのか見極めることは容易では無い。経済的なロジックからは、市場における高コスト生産者の短期限界生産コストの水準が一つの基準となろうが、瞬間風速ではそれを突き抜けて下がることもあり得ないことではない。今回の意見交換においても、一部の識者からは上記の短期限界生産コストはかなり低く、25 ドルあたりまで価格が短期的に落ち込んだとしても、それで止まるかわからないとの意見もあった。実際の原油価格の底値がどこまで行くか、誰にとっても読み切れない状況である。この低価格が消費者にメリットをもたらしていることは事実だが、同時に、石油部門投資を大幅に削減させ、産油国経済に大打撃を与え、世界経済にデフレ圧力をもたらす効果を生み出し、原油安と世界経済鈍化・株安が共振する等の問題も作り出している。ここまで来た原油価格大幅低下によって、「光」だけでなく「影」の部分への懸念が大きく高まっていると言っても良い。

現時点では、この競争市場的な状況が変わる兆しを見出すことはできない。しかし、上述してきたように、国際石油市場は管理者不在の時期の後、何らかのメカニズムを通して市場を安定させる取り組みが必ず模索されてきた。その点、少なくとも中長期的な観点では、今の国際石油市場の状況をそのまま単純に投影した考えに立脚することには問題がある、ともいえるだろう。国際石油市場の歴史が再び繰り返されていくのかどうか、今後も注目していく必要がある。

以上